

Title	草創期の三田史学(二) : 国史学を中心に
Sub Title	Historical school of Keio Universtiy during its formative years (2) from the standpoint of Japanese history
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.19(193)- 25(199)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

草創期の三田史学(二)——国史学を中心に——

河北展生

河北でございます。話題がどういふぐあいに発展するか全く予測ができませんのと暇が余りなかつたせいもあり、きのう『慶應義塾百年史』をばらばらと見てきただけの知識で今日はお話をしなければなりません。

いま神山先生がおっしゃったように、福沢諭吉から田中萃一郎に受け継がれて塾の史学科ができたのですが、一体田中萃一郎という人物を誰れがどうして慶應義塾へ引つ張ってきたのか。幼稚舎から塾に学んで文学科第一回生として卒業し、郷里の伊豆に帰り中学校長となり、その間郷土史『近古伊豆人物志』を書いている田中さんを、どうして、だれが引つ張り出してきたのか、その辺のことが史料的にはつきりいたしません。さきほども神山さんと話していたのですが、田中さんは文学部の第一回の卒業生でありますから、同期性に川合貞一さんとい

う文学部を背負って立って発展させた方がおられます。この川合貞一さんなどが、あるいは田中はできる人物だ田舎に置くのはおしい引つ張ってこい、というようなことではなかつたのかなと憶測していたのですが、明確な證據はありません。

ところで、塾の大学部ができるまでの卒業生の中で、どういう人たちが歴史書などを書いているかというようなことで見えますと、まず小幡篤次郎さんが考へられる。この人は福沢先生と同じ中津藩士ですが上士階級の出身で、福沢先生を非常に助けた義塾にとっては、大きな功労者であった人です。ところが小幡さんはいつでも福沢先生の背後に居て、表へはほとんど出てこられない。したがって、小幡篤次郎の名前を知っている人は少ないのですが、福沢先生と共に東京学士会院会員に推薦され

た立派な学者で、塾長、次いで塾頭にもなった人です。このかたが明治十九年と二十年に『小学歴史階梯』と『小学歴史』三巻とを書いていきます。これは実物を見てくる暇がなかったのですが、小学というのは小学校の歴史という意味ではなくて、簡単な歴史という意味だと思えます。このころ後輩になる人たちも幾つかの歴史の翻訳書を出版しています。

たとえば幼稚舎をつくられた和田義郎さんの『芙吉利史略』、あるいは東京郵便電信学校教官の稲垣銀治氏の『万国通史』、岐阜師範学校長をした海老名晋氏の『日耳曼史』大蔵省の役人を辞した後、東京帝国大学法科大学の教授や学習院教授をした田尻稻次郎氏の『万国史略』などいろいろの分野で活躍した人々が、歴史の翻訳書を出版しています。

このように翻訳でいろいろな西洋の歴史を勉強する。そういうことをするというのは、福沢先生の文明史論の影響と見ることが出来るのではないか。福沢先生が自分で書かれた原稿を与えて、文章の趣意を変へず未説の部分を直して、新聞に発表しろと命じて『国会論』という論文を発表させ（後単行本となった）た人に報知新聞の主筆をしていた藤田茂吉という人が居る。可成り福沢先

生に可愛いがられた人と思われれます。

その藤田茂吉が『文明東漸史』という本を書いておられます。その他に彼は渡辺華山だとか高野長英とかいう洋学者の伝記も書いておられますが、『文明東漸史』は明治十七年の著書で、かなり早い時期に文明論といった問題を取り上げている点で注目すべきものと思えます。

それから、名前はご存じだろうと思いますが、東京高等師範学校長となった三宅米吉氏などは近代的史学樹立の功労者といわれている人物です。それから東洋史のほうで、ことに大きな影響を与えたのは那珂通世氏です。那珂通世氏は明治十九年から大正の初めぐらいまで、盛んに東洋史関係の本を出しています。あと少しおくれませんが、異色の人では、速水先生がおられるからそちらのほうがご専門でしょうが、竹越与三郎などというような経済史の分野で活躍された人も出ている。そうかと思うと、同じ福沢先生の郷里の中津から出た人で、趣味から出たものですが、大阪毎日新聞の学芸部長をした高木利太という人が『家蔵日本地誌目録』（正統二冊）という、自分で地誌や地図を盛んに集めて、その目録を出版した人。戸川安宅（号残花）のように人物伝歴史ものを盛に書いた作家も出ています。

こうして見ますと、田中先生までの間に、何となしに

慶應義塾の体質に、田中先生がランケやランプレヒトの中からいいところだけを取ってくるというような、みずから選択して自分の好きなものを取り上げて、それを自分流に消化して書いていくというやり方が出て来ているように思います。それが『福沢論吉伝』であろうと思います。特に肩肘を張らず極めて平易な調子で書きあげたのが石河幹明さん。一般的に、それまでの伝記というのは、主題になる人たちをほめそやすことが主たる目的であるのに対し、石河さんの場合には非常に忠実な史料批判をやり学問的にも水準の高いものでありながら史料をうまく使って、非常におもしろく読ませる。小学校の子供にあの論吉伝を読めというのは無理でしょうけれども、われわれの時代であれば、昔の中学生の後半、三年生以後ぐらいならば、何とかかじりついて読んでいこう、そういう気が起きるような、非常におもしろい読みものになっている。石河さんは時事新報の記者ですから、読ませる技術があるのだと言えばそれ切りなのですが、非常におもしろく読ませながら、しかも学問的に耐え得るものを十分に書いた。こういった雰囲気、やはり何となしに田中先生のところにあるのではないかという気がい

たします。

さて本題にもどって田中先生の事ですが、文学部の歴史をごく簡単に振り返りますと、ご承知のように、明治二十三年に義塾に大学部ができましたが、——最初の一期はハーバードから呼んだ外国人の主任教師を中心にしていた。その外人主任教師時代が十年ぐらいたったところで学制改革の計画があり、学部別制をなくし大学部の科目の中から出来るだけ広く、自由に選択履修させようというような試みが行なわれたために、文学部は、一時中絶してしまふのです。それが明治三十七年に復活いたします。復活した文学部は留学から帰って来た人たちを中心としています。文学部発足の歴史の講義はいまお話のリースなどが明治二十四年と二十五年の二カ年慶應で教えており、リースのあとは磯田良、家永豊吉、こういう方が教えているのです。

ことに家永豊吉という人が、二十六年から中絶する三十三年ぐらいまでずっと長く教えていますが、どうもこの方がどういう歴史的な業績があり、どういう歴史観を持っていたかということがよくわかりません。たしかこの方は同志社を中途退学してアメリカへ行つて、アメリカで勉強して日本へ帰って来た。大変に弁舌の立つ人で

あつたらしい。慶應義塾をやめてから台湾製糖関係の会社に入り、またアメリカへ行つて、日本人講師としてアメリカで盛んに英語で日本のことを講義した。大変雄弁家だったという話だけは伝わっております。こういうような人が初期の歴史を教えていた。

文学部が復活した後は田中先生が国史を担当しておられるのですが、これは明治三十七年、三十八年だけです。四十二年まで、文学部は哲・史・文の三学科ではなくて、一まとめになつてゐる。それが、四十三年から哲学、史学、文学というような大きな系統で学部が構成されるのですが、大正九年ぐらいからは哲学と文学にはそれぞれ幾つかの専攻的なものができます。

たとえば英語学・英文学を主とするもの或は一般泰西文芸を主とするものとか、それから認識論及び哲学史を主とするもの、心理学及び教育学を主とするものとかいうようなものができるのです。しかし史学科だけは田中先生の主張で、日・東・西に分けない、史学科は一つとしてやるのだということです。こゝに田中先生の一つの大きな特色があらわれてゐるのではないかと思ひます。塾の史学科は出来るだけ広い視野の中で自分の専門分野を深めて行こうという意識が可成り強く働いていたよう

に思ひます。大きくいへば、福沢先生に始まる広い視野に立つて歴史を考へていくという考え方が、日・東・西に細分化しないということになつたのだと思ひます。しかし学問の細分化という傾向が強くなつて来たので、昭和三年から文学部の三学科を廃して十五専攻に分けることになつて、国史・東洋史・西洋史の三専攻制になつたのですが、史学科は一つだという考へ方は強く残つていました。

そういった中で、國史ではこれから恐らくおもしろいお話が出ると思ひますが、常に原典は何か、ということをやかましく注意された幸田先生を中心とする実証的な史学研究が進められていくことになるのです。早稲田の津田左右吉氏と論争した松本芳夫先生が古代史で頭角をあらわす。上代の土地制度で新分野を開拓するという形で中田薫氏説を批判した今宮新先生がこれに続くという形で、国史専攻の発展がみられます。

私は昭和十六年に予科を経て学部に進んだのですが、塾の史学科は日・東・西に分かれてゐるけれども一つだという意識が強く残つてゐることを示す面白い体験をしました。それは、私が学部三年になりますと、それまで学生委員をしていましたので、親しくしていただ

いていた西洋史の間崎万里先生が、私の顔を見るといやな顔をされる。何かご機嫌が悪いんですね。どうしてなのか原因がわからないでいた。そうしたら或日突然、「君、日本史だったんだね。僕は君を西洋史だと思ってたよ」と言われました。間崎先生は、学生を国史、東洋史、西洋史と分けては見ていない。しょっちゅう話しくる西洋史の学生だろうという感じで居られたにちがいない、その河北が卒業論文の相談にちつとも来ないじゃないか、こういうことでつむじを曲げられていた。それが、日本史の学生だったら来るわけがないというのでご機嫌が直ったという、大変おもしろい経験をしました。これなどはやはり田中先生の大きな影響があるのではなにか。そういう広い中で好きなことをおもしろくやっていくのだ、その中で自分が興味を持ったものを学生が受け継いでいく、あるいはそこから何かを得ていけばよいという雰囲気、当時の史学科中にはあったように思います。

そういう意味で、私は先生方からは勿論、三田史学会などに来られた先生や先輩からいろいろなことを教わりました。ことに自分に大変役に立ったと思うのは、いまならゼミでの研究発表と言うのですが、そのころは

演習と言っていました、その演習で発表する上級生にわれわれが図書館に入っていますと、おい、ちよつと来いと呼ばれて、ここからここまで写してくれと、よく史料を写させられたものです。下級生ですから写し間違いをすると、後で叱られる。史料というのはちゃんと写すべきものだということです。そういう実習を何回かやらされた。そうして手伝った史料をどのような論証の場に使われるのか、上級生の発表を聞く事で、よい実地の勉強になった。これなどは誠に有難い実習であつたと、今になって史学科の伝統に感謝しています。

史学科の大きな特色に、さつき神山先生がちよつとお話になりましたように、船田先生の歴史哲学というのがあつた。同時にそれにもう一つ加えると、伊木寿一先生の古文書学というものが早く塾に取り入れられたという事もいつておかねばならない。伊木先生は明治四四年度から塾に来られて、早速先生が中心になって見学旅行が行なわれるようになった。塾は当時、古文書等教材とすべき史料を十分持っているわけではない。実物を見ておく必要があるということ、明治の末に古文書研究を中心とする見学旅行というのが始まった。第一回の見学旅行のことは間崎先生がよく話されたことですが、史

学科の諸先生方も一緒に伊豆、箱根方面に出掛けていった。三島神社を訪ねたところ、大変貴重な古文書類が数多く発見されたので、これは一日で帰るのはもったいなさうというので早速学校へ電報を打って、三田の授業は休講にして予定を伸して約一週間史学科の旅行を続けたそうです。これなどは、塾はかたいようなところがあるかと思うと、大変に融通の効くおもしろいところでもある一つの証據でしょう。

そういう意味で、いずれ東洋史などではお話しになると思いますが、柳田国男先生を引つ張ってくるとか、そういう異色の人を引つ張ってくるだけではなくて、史学研究会というのがかなり古くから行われております。これは毎月一回、もちろん前座として学生が順番に発表するのは当然なのですけれども塾内に居られる史学科の先生方の研究発表が行なわれる、時にはいろいろな外部の先生方を御願してお話を伺うという会です。今は稀観書になつてゐる『維新前の宮廷生活』という三田史学会刊行の小冊がありますが、史学会での下橋敬長氏のお話しを活字にしたものです。この史学研究会の発表者の論題、参加者の署名が部厚い帳面に第一回から書き続けられたものが私の学生時代に丁度いっぱいになりました、次の

帳面に切り換えられました。前の帳面を間崎先生に届けました。終戦後になりましたして間崎先生が、河北君、「残念なことをしたよ、史学会のあの帳面を焼いてしまったから、古いところの発表者の氏名や演題などがみんなわからなくなっちゃったよ」と実に淋しそうに言われました。あの帳面が残っていていま神山先生などに見ていただくと、非常におもしろい人がおもしろい話をしておられるのではないか。そういう意味では、史料が失われた事は誠に残念です。一部『三田評論』の雑報欄などに題目などが出ているものもあります。

史学科の先輩の人達と会つてよく想出話として聞く話題は、史学科の研究旅行のことです。教室での授業のことよりも、研究旅行での色々な事が、学生時代のよき想出になつて居るようで、この経験がもとで、用事で旅行をした時を利用して、各地の史跡などを訪ねることが多いとも言つています。そうした事が、史学科への愛着心をおこさせているような気がします。

先輩が何時までも史学科に関心を抱き、折にふれて学校を訪れては、現役の学生諸君と接してゆくとといった温みのある学科として、今後の史学科は発展していつてほしいというのが私の願いです。

あとは林先生から幸田先生のお話が出ると思いますが、それからこのほうへ譲りたいと思います。

司会 どうもありがとうございました。

いま河北先生から、かつて史学科は一本で、いまのようにならざるに専攻に分かれていかなかったという、大変よき時代のお話を伺いました。年代的にはちょうど明治四十三年から四十四年の慶應義塾文学部刷新の時期までのお話がありました。いまのお話にもございましたように、ちょうどこのころに田中萃一郎先生を中心としまして、次に林先生にお話を願います幸田成友先生をはじめ、あるいは民間の史家でありました山路愛山、あるいは古文書学の伊木寿一先生、それから少しおくれましては松本彦次郎さん、さらにおくれまして川上多助さん、さらには民俗学の柳田国男などという方々が相次いで慶應義塾の教壇にあらわれました、明治末から大正時代を迎えたわけです。このあたりのところをこれから林基先生にお話を伺おうと思っております。どうぞ先生、よろしくお願ひいたします。